

D. ベーレンス=アブーセイフ著

オスマン朝支配に対するエジプトの適応
—— 16～17世紀のカイロにおける諸組織、
ワクフと建築物

林 佳世子

原題は *Egypt's Adjustment to Ottoman Rule: Institutions, Waqf and Architecture in Cairo (16th and 17th Centuries)* である。組織、ワクフ、建築物と並列される副題は「寄せ集め」のような印象であるが、結論を先に言えば、その印象は本書全般にもあてはまる。しかし本書が、マムルーク体制からオスマン体制へ、そして2世紀半におよぼイスタンブールの支配という、アラブ世界にとっての大きな変容期の歴史に正面から取り組んだ意欲的な研究であることは確かで、注目に値する。

さて、近年の中東イスラム史研究のなかでオスマン朝下のアラブ地域に大きな注目が集まっていることは言うまでもない。現在の当該地域の問題を正しく理解する鍵がそこにあることが第一の理由であるが、同時に、オスマン朝政府が残した文書史料に対する研究の進展も促進要因としてあげられよう。Michael Winter、Any Sincar、Amnon Cohen など、オスマン文書史料を積極的に用いたエジプト、シリア、パレスチナ研究が次々に発表されている事実はそれを裏付ける。

ベーレンス=アブーセイフによる本書もまた、このような研究の流れと切り離して考えることはできない。著者は、マムルーク朝時代のカイロ都市史研究を専門とし、「カイロのイスラム建築」⁽¹⁾などで知られた研究者であるが、彼女の新著は対象時代をオスマン支配期に拡大し、これまでとかく等閑視されがちであったオスマン朝下でのエジプト社会の外因的・内因的な変化を積極的に明らかにしようとする。彼女はエジプト側の史料に依拠し、支配者であるオスマン朝側の史料は全く用いないが、同時代のエジプト知識人が残した豊富な記述史料とワクフ文書史料を縦横に用いることにより、多くの新知見をもたらしている。特に、具体的な事象を多数紹介することで、表情のある研究書とすることに成功していると評者には感じられた。

以下、本書の内容を章ごとに紹介したのち、全体的な問題点について二、

三言及したい。

本書の章構成は次のとおりである。

- 第1章 序
- 第2章 マムルーク朝スルタンからオスマン朝のパシヤへ
- 第3章 オスマン朝下の行政機構
- 第4章 司法制度
- 第5章 宗教界
- 第6章 軍人貴族層
- 第7章 オスマン人とエジプト人の相互認識
- 第8章 オスマン朝支配下のワクフ
- 第9章 重要ワクフ文書集
- 第10章 オスマン朝支配がカイロとその建築物に与えた影響
- 第11章 まとめ

1章では、研究史と依拠した史料が紹介される。主たる史料は年代記、人名録、ワクフ文書である。

2章から6章までは支配エリートと支配組織の紹介を軸に、おおよそ時代順にエジプトの変容を追った部分である。まず2章ではオスマン朝征服前後の政治史が整理される。征服、アフメト・パシヤの反乱、カーヌーンの発布、反乱、新しい「パシヤ（総督）」の派遣というカイロを舞台にした激動期の一連の展開が、主にエジプト側年代記をもとに整理される。

3章ではパシヤ体制とディーワーン制度という、オスマン朝により導入された制度のうち軍事・行政に関わる二つの柱が紹介される。18世紀以前のディーワーンの機能は必ずしも明らかにされていないが、急激な変化を強くないオスマン朝の支配に、マムルークやウラマーなど旧来のエジプトのエリート層が協力していく過程が描かれる。また、オスマン朝支配下で存続したエジプトの在地エリート諸層 (notables) の性格について、マムルーク朝時代に支配的だった諸集団を縦断する個人的なパトロン・クライアント関係にかわり、オスマン朝支配下では各グループがむしろ制度化された組織となり、各グループの自立性が高まった。このことがむしろグループ間の人間の移動を可能にし、結果としてマムルーク朝期に比べ、オスマン朝下において社会の流動性は増したと述べる。

4章は、オスマン朝支配体制のもう一方の柱であった司法制度＝カーディー制度を扱う。マムルーク朝時代には、在地勢力の代表としてマムルーク支配層から一定の距離を保ち得ていたカーディーであったが、オスマン朝下ではその役割は全く別のものとなる。オスマン朝全体でそうであったようにエジプトでもカーディーは地方行政の担当者として位置づけられており、

カーディー・アルアラブ（スレイマン1世以後はエジプトのカザスケル）が、カーディー職のトップとしてイスタンブルから送り込まれた。この職やその下の四法学派のカーディーには、当初すべてトルコ人が任命された。（のち、ハナフィー派以外のカーディーはエジプト出身者となる。）カイロにおいて「オスマン朝支配」を民衆の目にみえるところで体现したのは彼らカーディーであり、法廷手続きの有料化、賄賂の横行、エジプトの慣習に反した裁定などは、「トルコの悪政」として民衆の怨差の的となったという。アラビア語を解さないトルコ人カーディーの詩作を揶揄する民衆の心情などへの言及は、アラビア語年代記や人名録史料を出典とし、本書の記述のうち特に生き生きとした部分でもある。

オスマン朝の制度化されたカーディー制の導入にともない、アラブ社会のウラマー層がどのように変化したのかは興味を引かれる問題であるが、カーディー制度の枠内でもカーディー代理職、あるいは、ムフティとして行政的な存在意義を保ったという。オスマン朝のイルミエ機構に参加していくエジプト出身のウラマーもわずかながら存在した。

しかし、在地のウラマーはむしろアズハルを核とするウラマーの組織か、スーフィー教団のメンバーとして、より大きな存在感を示している（5章）。アズハルが学問の府として権威を高めるのはオスマン朝下においてである。オスマン朝の「パシャ」は、参詣地的な性格をあわせもつアズハル・モスクを厚く保護し、マムルーク朝スルタンたちの手になるモスク・マドラサ群の地位が相対的に低下したのと相まって、宗教・学問の中心としてアズハルの地位は飛躍的に向上する。在地ウラマーの多くはアズハルを核に組織され、17世紀後半以後、シャイフ・アルアズハルの地位は特に高まる傾向にあったという。一方、バクリー教団、サーダート教団を筆頭に、スーフィー教団の活動も活発で、オスマン朝支配層に対し政治的な発言力を持つにいたる。なかでもバクリー教団長は、ナキーブ・アルアシュラーフと並んでオスマン朝「パシャ」の主宰するディーワーンのメンバーであった。

アズハル、バクリー教団、サーダート教団、そしてナキーブ・アルアシュラーフ職に共通するのは、預言者ムハンマドの血統に関係している点である。オスマン朝支配者はこの点に惹かれるものがあつたとみえ、その血統が政治的な意味をもつようになるのはオスマン朝期の特徴のひとつである、と著者は結論する。

以上の各章によってまとめられたエジプト支配体制は16世紀に形づくられたが、その変容は17世紀に訪れる（6章）。それは、「マムルークの台頭」という、一見逆説的な展開に他ならない。16世紀を通じ支配に協力するマムルークの門閥化がすすみ、彼らは新たに導入された徴税請負制を基礎に

富裕な特権階級（aristocracy）と化する。彼らはコーカサス出身の奴隷身分出身者が構成員の多数を占めた点をのぞけば、マムルーク朝時代のマムルークとの共通性をほとんどもたない新たな社会層と位置づけられる。カーシミー家とフィカーリー家の抗争のように門閥化したマムルーク内部の問題が17世紀の主要な政治問題となる。この時期以後、オスマン朝の中央集権体制は明らかに後退し、政治的にも経済的にもエジプトの権益は、エジプトのマムルークが奪い合うという展開を示す。

本書は、続く7章で、オスマン人とエジプトの知的エリートたちの相互認識というテーマを、互いを描いた歴史書を典拠に展開したのち、オスマン朝下カイロでのワクフ寄進や、ワクフ制度に組み込まれていた建造物の建築的特徴を扱う後半部へと続く。

8章は、カイロにおけるワクフ制度の展開を扱う。アラブ地域の征服がオスマン朝にもたらしたものの一つに「イスラムの盟主」という自負があったが、それに応えつつ、「イスラムの本場」を政治的に支配することはオスマン朝支配層にとって全く新しい経験であった。なかでも、運用面で多くの問題点を抱えた旧来のワクフ寄進を新支配者としていかに引継ぎ、活性化し、「イスラム的支配」を印象づけるかは、征服当初からオスマン朝支配層に課せられた大きな政治的課題であった。本書では、それがいかに行われたかが、特にカイロのワクフ商業物件を対象に詳述される。オリジナリティが高いという点で、本書の本領は8章以下にあるといえよう。

著者は、他の制度の場合と同じく、オスマン朝支配者がここでも急激な変化を避けつつ、一方でワクフ文書その他の資料を提出させての調査（タフリール）を実施するなどし、ワクフ地に対する課税をはじめとするオスマン的支配を徐々に浸透させていったとする。オスマン朝支配者が特に意を用いたのは、前代のマムルーク朝スルタンたちのワクフ寄進をいかに引き継ぐかであった。パトロンを失って荒廃しつつあったワクフ商業物件を再興する手段として、この頃から物件の長期賃貸借契約が認められるようになり、貸借者はまず物件を補修、再建したうえで低額の賃料で長期賃貸し、それを商人らに又貸しし、その賃貸収入を自らのワクフ寄進の財源に指定した。この結果、ももとのワクフ運営体にも低額ながら収入が保証され、かつ商業施設は事実上新たな寄進者のワクフ物件ともなる。この方法を用いて、オスマン朝「パシャ」らは、マムルーク朝スルタンのワクフ物件をリサイクルしていったという。

以上の手続きにイスラム法上の議論があることは明らかで、実際、ハナフィー派は認めていない。しかし、ハンバリー派やマーリキー派は容認しており、この問題を含むワクフ寄進を行う際には、オスマン朝の支配者も

ハンバリー派かマーリキー派のカーディーのもとで手続きを行ったという。

長期賃貸借慣行の定着は、すでにワクフ商業物件でいっぱいになっていたカイロの町に新たなワクフ商業物件を生み出すことを可能にし、この結果、ワクフ寄進によってのみ運営が可能な宗教、慈善施設を新たに建設する道も開かれた。同時にワクフ寄進は、個人的・世俗的な経済利益を生むものでもあったから、それを求めての参加も多かった、とされる。

著者は続いて、オスマン朝「バシヤ」、マムルーク・アミール、オスマン朝官僚である黒人宦官の寄進例をとりあげ、「バシヤ」の寄進がオスマン人の宗教意識を反映し、ハナフィー派のマドラサや聖者廟を主な対象としていることなどを指摘する。マムルークらは門閥化し財産の子孫への相続も容易になったため、当初、前代のマムルーク朝期ほど熱心にはワクフ寄進を行っていない。マムルーク・アミールや黒人宦官の寄進の中には、新地区の形成や発展に結びつくワクフ寄進がみられるが、基本的には、「アハリー（家族的）」な性格の寄進であると結論づける。

このように、ワクフ制度に反映する社会の変容をワクフ文書などから読みとろうとする8章は、もっとも意欲的な章である。しかし、一、二の事例から容易に結論が導かれることが多く、全体として説得的とはいえない。特に、特定のワクフ寄進の目的をワクフ文書の記述からのみ「家族的」、「政治的」、「慈善的」と断定する箇所がめだち、それぞれの定義が明確でないため、主観的な分類という印象は避けられない。そして、そこでの結論をもとに全体の結論が導かれているだけに、自ずと説得力は弱まる。ワクフ寄進の動機は複合的であるのが一般的で、そのような対象を扱うには、寄進後にワクフ運営体が実際に果たした役割を追跡するか、数多くの事例を統計的に処理するなどの方法がとられる必要があると思われる。

9章は、一種の資料集ともいえる章で、歴代のオスマン朝「バシヤ」のワクフ寄進の内容をワクフ文書から要約する。16世紀に職にあった「バシヤ」のうち半数がワクフ寄進を行っているのに対し、17世紀には激減、一方、マムルーク・アミールの寄進は17世紀後半から増加していく。ワクフ寄進が経済力、政治力を著実に反映することの証といえる。

10章は、オスマン朝の支配が都市の景観にいかに変化を与えたか、という視点から、今日に伝わるオスマン朝支配時代の建造物（ワクフ施設であるモスク、ザーヴィヤ、マドラサなど）の建築的特徴を扱う。その意味で、テーマ的には本書のこれまでの部分との連続性が弱い。8章、9章で例示されてきた個々のワクフ寄進が、現存する建物をみていくことで具体的にイメージできるという効果はある。

オスマン朝はカイロにおいて、イスタンブルの威光を誇示するような建

設事業は行っておらず、小規模なサビール・クッターブ（泉水つきのコーラン学校）や二、三の例外的なモスクを除いてオスマン様式の建造物は建てられていない。代わりに熱心に補修や修復を行っており、その際にオスマン風に改修せず、オリジナルな様式を復元しようとしていると著者は指摘する。ここから、オスマン朝支配層の歴史意識に「イスラムの歴史遺産の継承」があったことを読みとることは容易であろう。

続く11章は「まとめ」となっており、これまでの議論が整理された後、結論として、次の点が導かれる。全般的にみて、オスマン朝支配者は「継承者」としてカイロ入りし、破壊はもたらさなかった。軍事、行政、ワクフ、建築物の全てについて、前代のものを有効に「リサイクル」する方策をとり、そのため在地のエリートはむしろ、その展開に協力した。しかし、形は同じでも中身の部分では徐々に変化が浸透し、その結果、急速ではなかったにも関わらず、エジプト社会は確実に変化していった。結果として、エジプトは2世紀半以上にわたって完全なるオスマン朝支配を受け入れることになった。

さて、以上の要約から明らかなように、本書は、オスマン朝時代エジプトの支配エリートと支配組織を概説した前半部と、オスマン朝支配時代のカイロのワクフ寄進を扱う後半部の二部からなっている。いずれも興味深いテーマであることは疑いなく、特に後半部はオリジナルな史料に基づき、具体的なイメージを我々に与えてくれる。

しかし、本書の構成上の最大の問題点は、この二つの部分の関係が読者にはわかりにくい点にあらう。好意的に考えれば、後半部にワクフ寄進者として現れる階層が前半の概説によって性格づけられているといえようか。それならばなおのこと、ワクフ研究から、エジプトの支配エリートの特徴を抽出するという、逆の順番で論を組み立てられなかったものかという思いがする。実際、本書の前半部の焦点は、エジプトの全ての社会グループにではなく、カイロ在中のオスマン朝支配者とマムルーク、ウラマーというエリート階層にのみ当てられている。いうまでもなく、彼らはカイロにおけるワクフ寄進の担い手でもあった。実際にはカイロの事例を扱いつつ、結論は無条件にエジプト全体にあてはめられるという傾向は、本書の随所にみられる。

また、前半部には、その構成が、本書より1年早い1993年に出版されているマイケル・ウインターの『オスマン支配下のエジプト社会』⁽²⁾に酷似しているという問題点もある。出版時期がほぼ重なっており、詳しい事情はわからないが、少なくとも本書の出版の方が後である以上、これについてなんらかの言及があって然るべきだと思われる。（スーフィー教団に関

するウインターの論考は引かれている。)両者の比較は別の書評で既に行われているが⁽³⁾、ウインターの研究は本書同様オスマン朝のエジプト「支配」とエジプト社会の「変化」に興味を寄せており、「支配」に関しては当事者であるオスマン朝政府側のオスマン語史料を用い、また「変化」の面ではベドウィンやズインミーも視野にいれている点で、本書に欠けている側面を補っている。

本書をオスマン朝史研究の視点から読むと、いかにもイスタンブルが遠いという読後感はある。徹底してエジプトの視点から外来の支配者たちをみる立場がつかぬかれており、それはそれで一貫している。しかし、「支配」や「組織」が議論されるにあたっては、オスマン朝の構造全体を見わたしつつ、エジプトを位置づけることも必要だろう。エジプトの民衆にとってイスタンブルが遠かったように、著者もまた、エジプトに現れた現象としてのみオスマン朝の諸制度を扱い、その元来の性格や機能には興味がないようである。しかし、例えばオスマン朝政府がとったワクフ政策などは、ひとつエジプトだけの分析では正しい結論は導けまい。また、すでにエジプト史では定着した用法のようであるが、オスマン朝の総督(ペイレルベイ、またはワーリー)を「パシャ」と呼ぶこと、イスタンブルから派遣されたオスマン軍人・官僚の名をアラビア語風に読んでいる点(ムハンマド・パシャなど)などにも多少の違和感を覚えた。

このような問題点は目に止まるが、豊富なアラビア語史料からワクフ寄進を中心に多数の具体的な事実を提示し、そこに社会の変化の投影を探ろうとする試みとして本書は貴重であり、その手法は今後の研究に示唆を与えてくれる。構成面や用語の定義(特にワクフ関係の用語)、あるいは本の作り方そのものに雑な部分が散見されるが(単純なパソコンの出力ミスなど)、史料に精通した著者の与えてくれる情報量の豊富さが、ある程度その欠点を補っている。特にワクフ制度に興味をもつ読者は、自らの研究対象と比較して、興味深い事例を多数見いだすことができるだろう。

註

- (1) *Islamic Architecture in Cairo*, Leiden, 1989.
- (2) M. Winter, *Egyptian Society under Ottoman Rule: 1527-1798*, London, 1992.
- (3) A review by R. D. McChesney, *Journal of the Economic and Social History of Orient*, Vol. 38, Part 3 (1995), pp. 411-6.

批
評
と
紹
介
林

Doris Behrens-Abouseif

*Egypt's Adjustment to Ottoman Rule: Institutions, Waqf and
Architecture in Cairo (16th and 17th Centuries)*

E. J. Brill: Leiden etc., 1994.

第七十八卷

三〇七